



家庭科における「家族」の実践と教師教育の課題：
教員養成大学生の性役割・子育て意識をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2008-05-21 キーワード: 作成者: 増淵, 哲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005558

家庭科における「家族」の実践と教師教育の課題

— 教員養成大学生の性役割・子育て意識をめぐって —

増 渕 哲 子

北海道教育大学札幌校家庭科教育学研究室

The Present Problems of Teacher Education and the “Family” Practice in Home Economics Education

MASUBUCHI Satoko

Department of Home Economics Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本稿では、「家族」をとりあげた教育実践に学びながら、家庭科において性別役割分業の問題をテーマとした学習を構想し実践するために、教師教育として押さえるべき内容とは何かを考察した。前半は、教師教育の受け手である本学学生を対象とした性役割と子育てに関する意識調査の結果をまとめ、将来教員となる可能性の高い学生の意識を明らかにした。後半は、小学校高学年でおこなわれた働く人をテーマとした実践記録をとりあげ、母親と子育ての関係、女性と職業の関係をめぐる子どもの思考の跡を辿り、前半で報告した学生調査の結果を交叉させながら、家庭科の教師教育として必要な事柄を整理した。

1. はじめに

戦後の日本の教育は、男女の教育機会均等を原則の一つとしてスタートした。新学制の発足とともに男女共学が実施され、新教科として誕生した当時の家庭科も、男女に開かれた教科として位置づけられた。しかし内実は異なり、小学校家庭科では、共学とはいえ女子には裁縫教材、男子には工作教材というように一部に男女別教材を用意していた。中学校では家庭科を職業科の一分科目として置き、女子の履修を期待した。また高等学校では自由選択科目であったが、同じく女子の履修

を前提としたのである。

しかし面白いことに、戦後初期の家庭科カリキュラムの中で、家族の学習については共学の必要が強く主張されていたという事実がある。戦後の家庭科教育は民主的家庭の建設を理念として誕生したといわれるが、そのためには家族の学習は不可欠とされたのである。

ところが小学校家庭科では、誕生後の早い時期に、家庭科の「存廃論」が巻き起こる。廃止論の根拠の1つはまさに家族の学習にまつわるものであり、家族の学習が社会科でのそれと重複することから、家庭科は社会科の一部に過ぎないと主張

されたのである。その結果、家庭科は、家族の学習ではなく家庭実務の学習に傾斜していった。中学校の家庭科は変化が激しく、教科名はしばしば変更されている。1958年以降は「技術・家庭」という名称が使用されているが、当時の科学技術教育重視の動きと相まって、家族の学習は、1989年に復活するまで削除されたままであった。高等学校に至っては、女子向き教科としての性格付けが徹底され、男子は履修せずという動きになっていく。

では1989年、中学校で「家庭生活領域」として家族の学習が復活して以降はどうであろうか。当時の「家庭生活領域」の家族の学習が、事実上、被服領域や食物領域の学習に本格的に入る前の基礎的技術体験領域になっていたことは記憶に新しい。家族の学習を家族の学習として扱うことができているのは、現行学習指導要領も同様である。小学校の現行学習指導要領や教科書、また教育課程審議会答申において、盛んに家族重視の姿勢が強調されるが、家庭実務の働きかけの対象を個人ではなく家族とすることが、家族の学習の中身だと考えているように思える。すなわち家族の学習は、家族のために何かをしてあげるといふ思いやり学習になってしまい、それ以上思考が発展していかない。家庭科の歴史的経緯が、家族学習の深化を妨げたのは疑問の余地がない。

しかし、家庭科は家庭生活を学習対象とする教科であり、こうした事情はありながらも、家庭生活学習の中核として「家族」を位置づける必要は、家庭科教師の多くが認めるところである。これまで実技系の教材については教材研究が蓄積されているものの、家族の学習については、必要性は認めながらも十分な蓄積がおこなわれずに今日に至っているというのが現状なのである。

本論文では、こうした事情をふまえながら、家族学習の、特に性別役割分業問題の学習内容を構想し実践する視点から、教師教育としておさえるべき内容を考察する。前半では、小学校家庭科教育法受講者の性別役割分業観の一端を明らかにするために実施した、女性の就労と子育て役割につ

いての意識調査結果を報告する。後半では、ある実践記録をとりあげる。実践記録のなかでの子どもの思考を追い、前半で報告した学生調査の結果を再考しながら、実践から逆に家庭科の教師教育への示唆を読みとっていく。

なお、筆者の家庭科教師教育の全体像については拙著¹⁾に示したが、ここでは、2004年度受講学生の実践記録の感想を掲載した。本論文でとりあげたのは、2005年度受講学生の意識調査結果と実践記録の感想である。

2. 学生の性役割・子育て意識に関する調査

(1) 調査の概要

小学校家庭科教育法の受講者を対象に集団実施したものである。調査日は2005年10月3日、調査対象者数は206名（男子82名、女子124名）、学年の内訳は、2年生128名、3年生64名、4年生11名、その他3名である。回収率、分析率ともに100%であった。

調査項目は、女性の就労に関する考え方と、子育てに関する考え方に大別される。女性の就労については、就労後の仕事の継続に関する考え方、特に再就職希望者に対してその理由、就労形態、子育てに関しては、3歳児神話についての考え方、母子関係、保育施設についての考え方などを質問した。

(2) 女性の就労に関する考え方

女性の就労、母親の就労

女性の就労についての考え方を図1に示した。女子学生の場合は、自分自身の卒業後の就労に関して、男子学生は、パートナーを想定してどう考えるかを尋ねたものである。なお、調査対象者のうち、約70%の学生が教員志望、10%が非志望、20%が現在のところ未定と答えている。さて就労については、就労継続型（図中の「ずっと継続」）は男子28.0%、女子38.7%、再就職型（図中の「結婚後やめ再就職」「出産後やめ再就職」の合計）は男子34.1%、女子43.5%である。また結婚・出

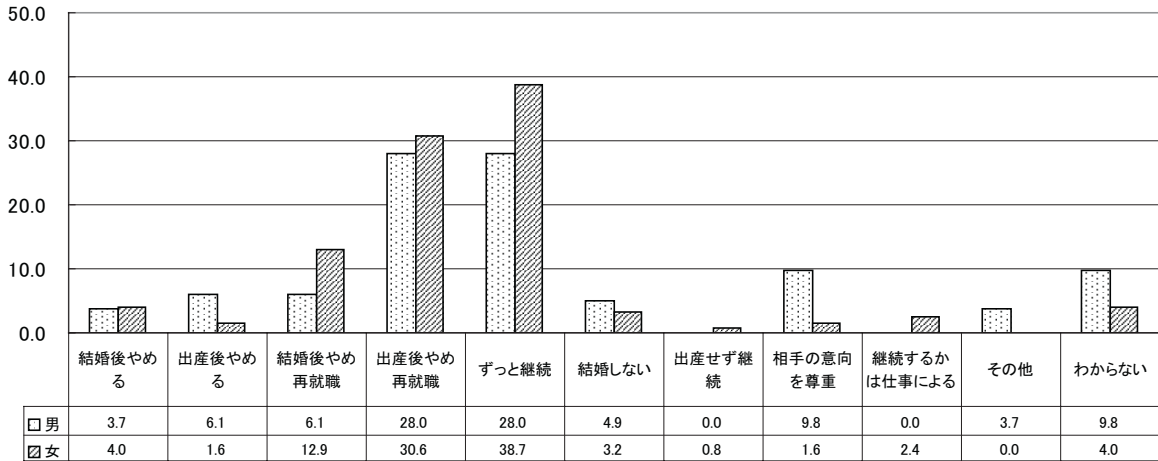


図1 女性の就労についての考え方

産退職型（「結婚後やめる」「出産後やめる」の合計）は男子9.8%、女子5.6%だった。女子は男子よりも就労継続型、再就職型が多いという特徴は「男女共同参画社会に関する世論調査」²⁾でも共通するものである。しかし個々の数値を、この「男女共同参画社会に関する世論調査」の20～29歳層と比較すると、本学学生は就労継続型、再就職型ともむしろ少ない。本学のような目的大学、かつ女性の職業としても人気の高い教職志望学生の就労希望であることを考慮すると、目的大学だからといって就労意識が高いわけではないとるか、または子どもの教育と直接関わる教員養成だからこそその意味が隠れているのか気になるところである。

図2は、母親の就労について尋ねたものである。親世代（現在50歳代が多いと思われる）の状況を見ると、この場合は「意識」ではなく「実態」と

いう違いを考慮する必要があるにしても、就労継続型と結婚・出産退職型の割合は、現在（図1）とは大きな差がある。時代の変化を思わせるものである。学生の出生時期に当たると予想される1984年の女性の就労意識に関わるデータがあるが³⁾、当時の女性の就労継続希望は20.1%、再就職希望が45.3%、結婚・出産退職希望が21.7%である。面白いことに、図2の男女の回答平均とほぼ重なる（図2では就労継続型19.1%、再就職型46.2%、結婚・出産退職型22.1%である）。必ずしも出産時期の女性のみを対象とした調査ではないと考えられるが、こんにちより性別役割分業意識が強固に浸透していた時代であったことは事実であり、図2の母親の就労状況を実態としてとらえれば、当時の意識と実態の相違は小さかったのかもしれない。またこの問題に関しては、意識と実態には

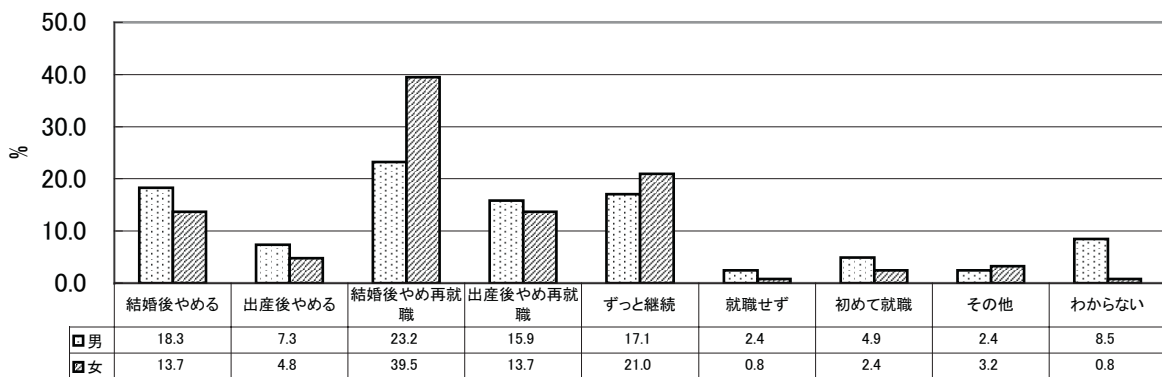


図2 母親の就労状況

大きな隔たりはないと考えられるということになるかもしれない。「平成16年版働く女性の実情」⁴⁾では、結婚・出産前の就労意欲は、その後の実際の就労継続実態に影響すると指摘しており、今回の大学生の回答も、変化の大きい時代であることを考慮しつつも、彼らの今後の就労実態として読みとることが可能だということになる。

職業の中断理由

再就職を希望する学生に、職業生活を中断する理由を尋ねたのが図3である。女性の就労についての考え方に關しては、男女の差は縮小しているかに見受けられるが、中断理由としての家事や育児の担当については、その差は依然大きい。「母親は子どものそばにいた方がいいから」は男子60.7%、女子40.0%、「自分が子どもの成長を見守りたいから」は女子36.4%、「家事・育児との両立が困難であるから」は男子28.6%、女子23.6%であった。

こうした調査の回答には共通して言えることだが、この結果を、「男は仕事、女は家事・育児」の性別役割分業意識がいかに浸透しているかを見ることと、社会の中に根強く存在するそのような規範に合わせざるを得ないやむなさとして見ることの両者が必要だろう。そうした両面が伺えるのは「家事・育児との両立が困難であるから」の回答である。すなわち現実として、女性が子どもを育てながら働くことが容易ではないという中での選択と読みとる必要である。もちろん、前提として家事・育児は女性の仕事との規範が強いは思っているのであるが。

男子学生の場合は、子どもと母親の結びつきや母子関係の大切さ云々以前に、子育ては母親が責任を持つべきという前提が存在している。女子学生の場合はそれに加えて、自分の身体から生まれ出た子どもへの愛着、子育ての楽しみが優先するという意味の回答に分かれる。

では中断するという同じ学生が、再就職理由についてはどのように考えているのだろうか。経済的理由を再就職の主な目的としてあげたのは、男子学生32.1%、女子学生38.2%だった。それ以外の理由を挙げたのは残りの男子学生67.9%、女子学生61.8%だった。理由は自由記述で示してもらったが、女子学生は、大別してほぼ3種類の意見に分けられた。「自分自身の生きがいのため」「やりたい仕事である」「人や社会とつながりたい」がそれである。男子の場合は記述が少ないのだが、「本人のやりたいことをしてほしい」「働きたいならその希望を尊重」「社会に出るべき」「働くことで子どもへの責任を分担する」という記述があった。生活費や子どもの学費を稼ぐという経済的理由によりやむなく職業に就くよりも、多数は生きがいや仕事への意欲、社会とのつながりを持ちたいと考えている。育児の期間はこうした気持ちを一時抑えているわけである。

再就職時の就労形態

図4は、同じく再就職を望む場合の就労形態を表したものである。

ここでも男女の差は大きく、女子学生は「正社員（正規雇用）」を望む者が多く、これに近い割合で「パート」が続くのに対し、男子学生は「パー

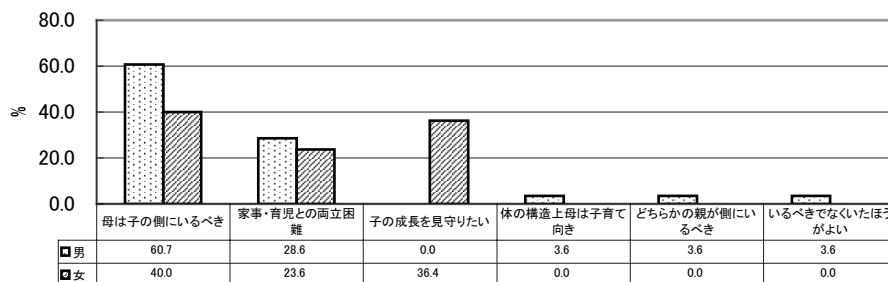


図3 職業の中断理由（女55名、男28名）

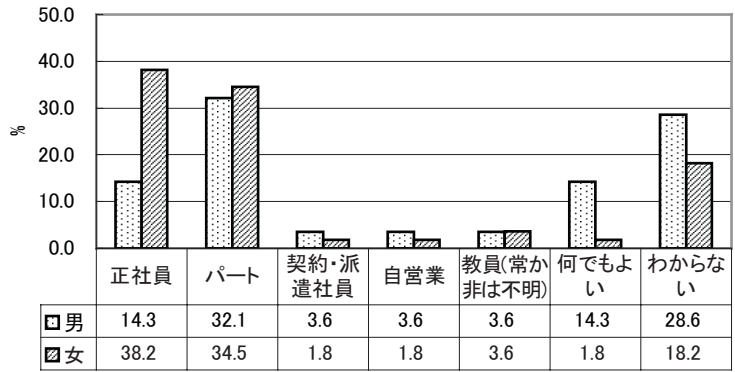


図4 再就職時に望む就労形態 (女55名, 男28名)

ト, 次いで「わからない」, そして「何でもよい」と「正社員」が並ぶ。家事・育児との両立を前提とするパートを希望する一方, 女子学生は働くのなら正規雇用でと考えている。男子学生の場合はこうした女子学生の気持ちに無頓着で, 女性が職業を持つことを, むしろ女性の片手間仕事と考えている様子が伺える。

次の図5は, 子どもが何歳になった時再就職したいかを尋ねたものである。

いくつかの山があるが, 最も多いのは10歳, 次いで12, 13歳, さらに6歳に集中している。小学校高学年時, 中学校入学時, 小学校入学時と重なると考えてよいと思うが, 女子の場合は2歳から8歳までの間に数%ずつ分散するのも特徴である。つまり, 小学校入学時, 高学年時, 中学校入学時を子育ての節目と考えて, 子育てに手がかからなくなったので再就職を, ということなのだろう。6年, 10年, 12年の子育て期を経てからの再就職だが, 子どもの数が複数の場合はさらにこの期間が伸びることになる。また女子学生の場合, 低年齢時の再就職希望が見られ, これは, 図4の

正規雇用を望む気持ちと関わると思われる。実際, 4歳までの回答者は正社員を希望する女子学生のみであった。それを除けば, 女子の正社員希望者もパート希望者も年齢は分散しているし, 男子の場合は, 正社員でも6歳以上であった。

(3) 子育てについての考え方

3歳児神話に関して

図6, 7は, 「3歳児までは生みの母親の手で育てなければ, 子どもの心に傷を残し発達に悪影響を及ぼす」という, いわゆる3歳児神話と呼ばれるものについて, 知識の有無とその説への共感の程度を尋ねたものである。

図6のように「言葉も内容も知らない」が男子学生63.4%, 女子学生55.6%と半数以上を占めており, 調査の時点では学習経験は無いようである。反対に「言葉も内容も知っている」と答えたのは, 男子学生15.9%, 女子学生15.3%であった。図7の共感度については, 「とても共感できる」が多いわけではないが, 「とても共感できる」と「少し共感できる」を合わせた「共感」の割合と, 「あ

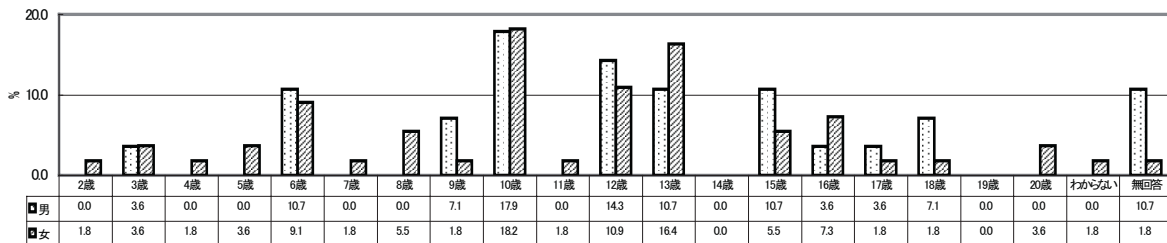


図5 再就労時の子どもの年齢 (女55名, 男28名)

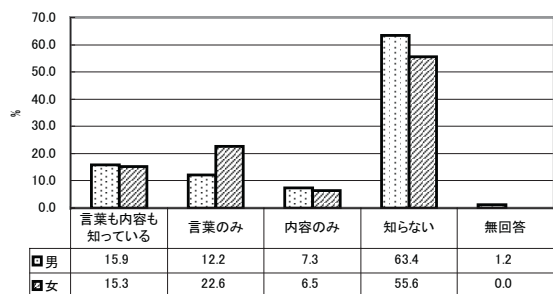


図6 「3歳児神話」を知っているか

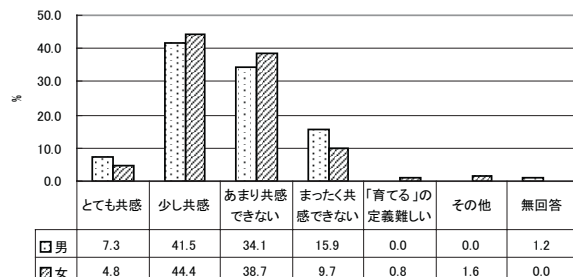


図7 「3歳児神話」に共感できるか

まり共感できない」「まったく共感できない」を合わせた「非共感」の割合はほぼ等しい。この共感度（共感の有無の回答のみ）と知識の有無をクロスしてみると、共感度の高い順に「内容のみ知っている」78.6%、「言葉も内容も知らない」52.5%、「言葉は知っているが内容は知らない」40.5%、「言葉も内容も知っている」38.7%となった。すなわち、「3歳児神話」に共感するのは、「神話」であることを知らない層が多いということになる。また、この3歳児神話を「三つ子の魂百まで」と同じと思っていたというコメントを書いた学生もいた。

次の図8は、ではこの3歳という年齢にこだわりはあるのかを見るために、「あなたとしては、母親が外に働きに行かず、子どものそばにいたいのは何歳までだと思いますか」と尋ねた結果である。「3歳」と答えたのは、男子学生14.6%、女子学生6.5%で、この男子学生の数値は全体で最も高い。また、図7の神話への共感度とこれをクロスしたところ、「とても共感できる」の回答者はすべて6歳以降に点在していた。他の回答者は全体に分散しているが、「3歳までは母親の手

で」という3歳児神話との関連を見るため、3歳に満たない2歳まで（表中0歳、1歳、1.5歳、2歳の回答者）と答えた学生の神話への共感度を見ると、「とても共感できる」は前述したように0%、「少し共感できる」は10.1%、「あまり共感できない」は28.9%、「まったく共感できない」は48.0%であった。すなわち、3歳を1つの節目として考えている学生は一定数いるということである。また、図5ほどのはっきりとした山ではないにしても、3歳以外に6歳に山があることが図8からは読みとれる。小学校入学時期までを最低限と見ているのである。さらに図5と比較すると、図5より年齢が低く回答されていることがわかる。実際、2つをクロスしてみると、再就職希望者の中で再就職の希望時期は、母親が子どものそばにいたいと同じ人間が答える時期より高い年齢になる傾向がある。

図9は、小学校入学時が1つの山となることとの関連で、「小学校入学前の子どもをもつ母親は子育てを最優先すべきだ」という考え方についてどう思いますか」と尋ねた結果である。これをみる

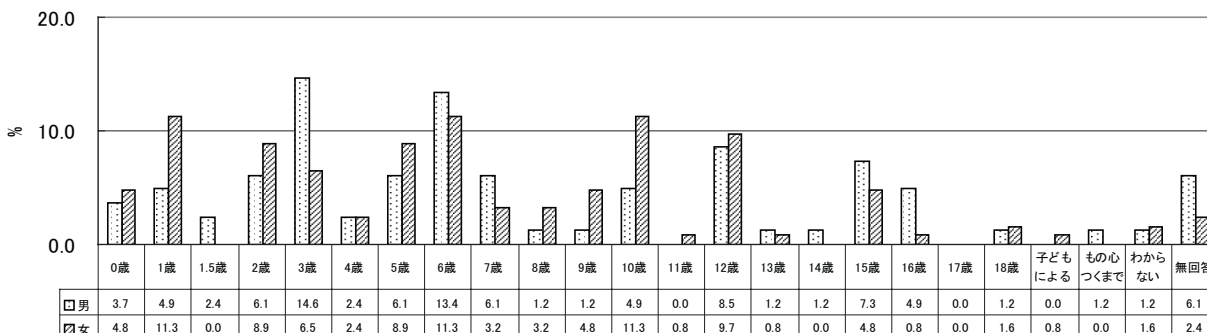


図8 母親は何歳まで子どものそばにいたいのか

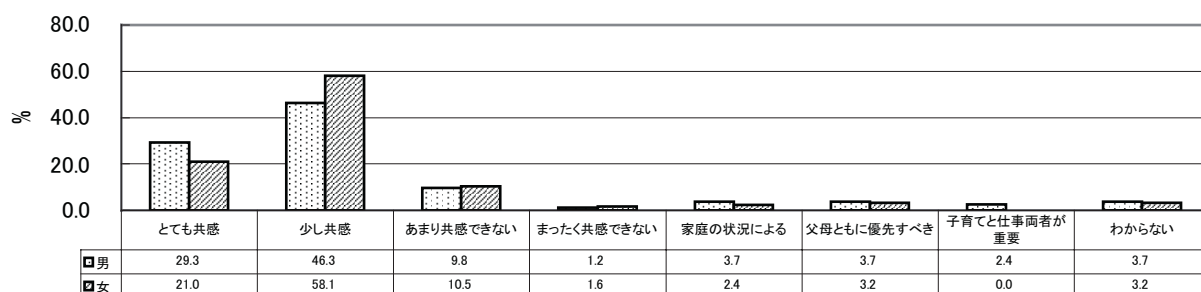


図9 「小学校入学前の子どもをもつ母親は子育てを最優先すべき」についてどう思うか

と、「とても共感できる」男子学生29.3%、女子学生21.0%、「少し共感できる」男子学生46.3%、女子学生58.1%と肯定的意見は多い。「とても」と「少し」を合計すると、男子学生75.6%、女子学生79.1%と、共感は8割弱となる。図8と合わせて考えると、3歳を大きく超え、6歳、更には子どもの義務教育期間終了時まで、母親業に専念すべきと考えている学生が少なからずいると考えられる。

保育所・幼稚園の利用についての考え方

表1は、「乳児を保育所に預けること」、「幼児（1～3歳）を保育所に預けること」、「幼児（4歳～）を保育所に預けること」、「幼児（4歳～）を幼稚園に預けること」についてどのように感じるかを尋ねた結果である。

参考までに、大学生たちに、自分自身の小学校入学以前の過ごし方を尋ねたところ、幼稚園通園者が男子学生76.8%、女子学生67.7%、保育所は男子学生15.9%、女子学生23.4%、幼稚園と保育所の両方に通ったのは、男子学生4.9%、女子学生8.9%だった。圧倒的多数は幼稚園の通園者である。

さて、表1の結果であるが、まず1歳未満の乳児を保育所に預けることについては、預けることそのものについて抵抗あると答える学生が多く、男子学生42.7%、女子学生53.2%とほぼ半数近くになる。乳児期はまず親の手でということなのだろう。施設や保育者の質に不安を感じると答えた者は、男子学生14.6%、女子学生16.9%で、1歳以降の預け先（表中②、③、④）と比較すると、不安を感じると答える割合が高くなる。

表1 保育所・幼稚園に乳児・幼児を預けることについて

(%)

	①乳児を保育所に預けること		②幼児（1～3歳）を保育所に預けること		③幼児（4歳～）を保育所に預けること		④幼児（4歳～）を幼稚園に預けること	
	男	女	男	女	男	女	男	女
預けることそのものに抵抗ある	42.7	53.2	25.6	21.0	3.7	2.4	0.0	0.8
質に不安感じるので抵抗ある	14.6	16.9	12.2	15.3	6.1	4.8	4.9	0.0
質に不安感じず抵抗ない	17.1	15.3	26.8	33.1	31.7	40.3	30.5	28.2
発達により影響を及ぼすのでぜひ預けたい	2.4	0.8	11.0	5.6	34.1	35.5	54.9	66.1
その他	7.3	4.8	6.1	3.2	7.2	3.2	3.6	1.6
わからない	14.6	8.9	17.1	21.8	15.9	13.7	4.9	3.2
無回答	1.2	0.0	1.2	0.0	1.2	0.0	1.2	0.0
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

②では①の乳児ほどには預けることそのものへの抵抗はなくなる。しかし施設や保育者の質に関する不安は大きく減少するわけではない。「抵抗ある」として一括すると、男女とも4割程度が、家庭内での育児に対するこだわりが見られる。

次いで③、④の4歳以降になると、「抵抗ある」とする者は大幅に減少する。また③の保育所と④の幼稚園の比較で興味深い点は、幼稚園の評価が非常に高いことである。預けることそのものへの抵抗は全く無いか、無いに等しい(男子学生0%、女子学生0.8%)。そのみならず、「子どもの発達に良い影響を及ぼすのでぜひ預けたい」との回答は男子学生54.9%、女子学生66.1%にもものぼる。保育所については、質への不安は感じないと答えているものの、同じく集団で育つ場であるにも拘わらず利用を肯定的には捉えていない。また、①～③の保育所に共通して言えるのは、「わからない」の回答が目立つことである。前述したように、学生自身は、圧倒的に幼稚園通園者が多い。保育所は未知の場でもある。

(4) 調査のまとめ

以上、教員養成大学生の女性の就労と子育てについての考え方を見てきた。結果を整理すると、以下の通りである。

ア 女性の就労についての日本人の意識は、結婚退職型の減少と、就労継続型の増加が近年の変化の特徴である。本学学生の場合も、結婚・出産退職を望む者は少なく、再就職型、就労継続型はこの順に希望する割合が高い。

イ 再就職希望者の中断理由は子育てをめぐる母親役割と強く結びついており、男子学生の場合は、「母親は子どものそばにいるべき」という意識が特に強い。

ウ 女子学生が再就職を望むのは、多くの場合「生きがい」や職業を希求するがゆえであり、就労形態も正規雇用を望む者は多い。しかし、再就職を望む男子学生には、正規雇用のような本格的復帰を想定する者は少ない。また、経済的理由を再就職理由にあげたのは男女と

も4割に満たない。

エ 上記ウと関連し、女子学生が希望する再就職の時期は、一般に男子学生のそれよりも早い。しかし一定層を除けば、女子の場合も再就職時期を学齢期後半に希望する場合もみられる。このことは、職業生活に空白期間のある女性が再就職を目指す場合の課題を伺わせる。子育て責任を一手に担い、その責任をある程度果たしたゆえに本格的に職業生活に復帰し、改めて職業人としての生活を獲得したい女性と、空白期間の長さのゆえに、復帰後の職業生活を片手間仕事と見なすこともやむなしと考える男性との意識の格差である。

オ 約半数の学生が「3歳児神話」に共感し、当然と言うべきか、これは学習経験のない学生に多い。また学習経験そのものも全体に少ない。「3歳までは生みの母親の手で育てる」に共感する学生ほど、母親が子育てに専念する期間をより長く想定している

カ 保育所と幼稚園の捉え方については顕著な違いが見られた。学生自身は多くが幼稚園への通園経験があり、保育所については「わからない」と回答する者が少なくない。保育所は未知の場所である事が保育所のマイナスイメージにつながっているように思える。同じように集団で育ち合う場所であるにも拘わらず、幼稚園は「子どもの発達に良い影響を及ぼす」と回答する割合が保育所に比べ顕著に多い点は興味深い。教育機関として学校教育法で規定される幼稚園と、児童福祉施設として児童福祉法で規定される保育所の相違を、学生はこの様な意味合いで捉えていることには、教師教育を考えるにあたって留意すべき点である。

さて、これら学生の意識は、こんにちの日本人の意識と大きく違うものではないかもしれない。しかし少なくとも教員養成大学の学生の意識であるには違いない。こうした学生の女性就労観、子育て観を見据えながら、いかに教師教育を充実させるか、いかに教員の力量形成につなげるかとい

う視点は不可欠である。

そこで本論後半では、こんにちの家庭科の家族学習、とりわけ性別役割分業問題に関わる学習をめぐる、家庭科の教師教育としては何を提示する必要があるのかを、前述した学生の意識のありように留意しながら述べることにする。

3. 「家族」の実践と教師教育

(1) 実践記録

ここに家族学習のあり方に示唆を与えてくれる一つの実践記録がある。小学校高学年の2年間にわたる総合的学習の時間の実践記録「働く人の姿を自立への糧に」（藤原共子先生実践）である⁵⁾。

（以下藤原実践と呼ぶ。）子どもたちが、多くの働く人々に出会いながら生き方を学んでいく実践であるが、そもそもは家族をどのように学んでいくかを意図しているものではない。しかし、母親が登場する以下の記録部分は、性別役割分業の問題を取りあげる学習に手がかりを与えてくれるものである。

こうしたら「将来の夢のできあがり」という方法はありません。まず子どもたちの学校生活と係わって働いている人の姿を紹介し、そこで感じるものを知りたいと思いました。

修学旅行で行った海響館のトレーナーさん、写真屋のリリーさん。そして、今自分たちが興味ある人々へのお仕事調べと移っていきます。（1学期）

ところが「うちの母さんはなりたくて保母さんになって、保母さんがとっても好きだったんだけど子どもが生まれたのでやめました。」という奈々の聴き取りに対して、「何でやめるん」と自然に声が出ました。「だって、なりたかったんじゃろ？」

そう言われれば確かにそうです。またお母さんに聞いてくることになりました。

私の様な働く女性にしてみれば、家庭と子育てとの両立という悩みは、あまりにあって当たり前で、子どもたちの自然な疑問がとっても新鮮でした。

そこで私のほうからも、質問の出た香坂さんに協力を願って、「やりたかった仕事をやめたわけ」を奈々に話してもらうことにしました。

電話でいきさつを話すと、「やめるときには、一応話したつもりだったのですが」と前置きしながらも、「私と奈々にとっても良い機会になると思います。」と言われました。

そんなこともあって、結局ワープロで清書した文章がクラスに届くことになったのです。

「私が仕事をやめた理由」

香坂奈々さんのお母さん

私が仕事をやめた理由は、「仕事と家庭の両立が難しくなった」ということだったのですがわかりやすくいうと「とても忙しくなった」ということです。

みなさんもお母さんを見ていてわかると思いますが、食事のしたく、洗濯、掃除の他にも小さい子供がいるところはその子供の世話、などととても忙しくしていると思います。

それに加えてお仕事をしているお母さんはとてもたいへんです。そして私は家のことも、仕事も両方ともきちんとやっていく自信がなくなっていました。

それに子供達とゆっくり遊んだり、お話ししたりする時間がほしいと思うようになりました。私に家にいる時間はとても忙しくしていたので話を聞いてあげることもできなかったのです。

朝、早く出勤する日は6時30分に家を出ていたので、子供達が学校に行くときも「いってらっしゃい」が言えず、帰りは子供達の方が早かったので「おかえりなさい」が言えませんでした。

誰もいない家に帰ってくるのはとてもさみしいだろうなと思うようになりました。

夏は暑く、冬は寒い家に帰ってくるのがかわいそうになってきたのです。

仕事をしているときも家のことが気になるようになり、今、なにをしているのだろうか、「寒くないだろうか」「宿題はやっただろうか」などと考えるようになりました。

保育園に通っている子供達もお母さんが仕事をしている子供ばかりなので、時々さみしそうにしている子供がとっても多かったのです。そんな子供達を見ていると家で待っている子供達も本当はさみしいのでは・・・と思うようになりました。そこで思い切って仕事をやめることにしました。

私の子供達は、仕事をやめてほしいとか、家にいてほしいとかは言ったことがありません。今も家族が多く忙しくしているのであまり話す時間がないのですが、今は仕事をやめてよかったと思っています。

それでも自分のなりたかった仕事、好きな仕事なのでまたやりたいです。

子供達が大きくなり安心して家を留守にできるようになったらまた仕事をしたいと思っています。

香坂さんにお話をお願いしたとき、「私が保母だったから、やめたのでしょうか。」と言われました。「どういうことですか？」と尋ねると、「よその子の姿を見ると、自分の子どもの姿を思うのです。」と、お返事が返ってきました。

彼女は現在4人のお子さんがいて、しかも自営です。「私も3人目までは働いていたんですよ。4人目が生まれてやめたのです。」という話に、ぎりぎりの所までやりたかった仕事だろう、と思いながら電話を切りました。奈々はこれをどう読んだでしょうか。

私のお母さんは約3年前に仕事をやめました。

理由は「仕事と家庭」との両立です。

私は最初にこの文を読んだときは、とても悲しくなりました。だってこの手紙は母からもらう初の手紙だからです。

でもだんだん読んでる内に、「もしかしたら姉弟のために気をつけてやめたのかもしれない」と思うようになりました。

たしかに私は仕事をやめてほしいと思ったことはありません。

考えてみたら、私の心の中では「仕事をやめてほしくなかった」のかもしれない。

お母さんは、3年前おじいちゃんが死んでからお父さんの手伝いをしてるけど本当は仕事をやりたいのでは、と思ったこともあります。

「家でたまにはお菓子でも作ってむかえてあげたい。」と言っていました。

私は、そんな母の願いがかなうといいと思っています。

香坂奈々

「気をつけてやめたのかも」という言い方はこの年齢になったからこそ言えると思いました。彼女は、お母さんの立場になってものを考えるようになっていたのです。

彼女にとって、かなえてあげたいのは「仕事」ではなく「母の願い」なのです。

その後の学習を経て、

私のお母さんは保母さんをやめてお父さんのお手伝いをしています。

お母さんは、私が3年生の時に正式に仕事をやめました。

理由はわからなけれど、私が思うには、おじいちゃんが死んだからだと思います。おじいちゃんが死んでから、お母さんはお父さんのお仕事の手伝いをしなくてはならなくなりました。

最初にこの勉強のことを話したとき、お母さんは「お母さんも仕事しよっかなー」と言いました。私は、「別にやってもいいよ。」と言ったら、お母さんは、「じゃ、家にいなくてもいい」と言いました。私はそのとき「ギク」として、「それはやだ」と言いました。

私はお母さんに家にもいてほしいし、仕事もやってほしいです。

でもそれを決めるのはお母さんだからその件はお母さんに任せます。

それに私はもう6年生だから弟を保育園にむかえに行けるし、面倒もできるから私はお母さんに仕事をするなら安心して仕事をやってほしいです。

それになやみがあるなら、そっと私に相談してほしいし、私のことをもっともっと今思っている以上に信用してほしいです。

最初家にいてくれてうれしかったけど、仕事をしたいならしても「OK」だし、やりたくないならやらなくていいです。(後略)

(以下略)

一読してわかるように、藤原実践は性別役割分業問題を考えることを目的としておこなわれたものではない。しかし、ここに登場する母親の葛藤はまさしくそこに起因している。

これまで小学校家庭科で性別役割分業に迫ろうとした実践では、家庭内の仕事が家族員でどのように分担されているかを調べ、一人の家族（ほとんどは母親）に集中しているという事実を確認し、他の家族員、特に小学生である自分ができることは担えるようにしよう、という展開が多い。さらに補足すれば、このような家族学習を家庭科学習全体の導入に位置づけて、後に続く衣食住の学習に目的意識をもたせることも多くおこなわれる。

しかしこのような展開には次のような限界が指摘されてもいる。「母親が仕事をするのは当たり前、父親は外の仕事で遅いから家の仕事はしなくてよい。自分がもっとやらなければという気持ちをもった子どもは多かった。私も大きくなったらお母さんみたいにたくさん仕事をすると言う子もいた。」⁶⁾

かつて城丸彰夫は、「戦後の社会科や家庭科は、一貫して、社会的な男女の平等を軽視あるいは無視して、教室や家族内に限定して、男女仲良しを強調してきた。つまり、『家』制度の崩壊を、家庭の男女生活のなかにのみ幸福があるとす、いわゆる『片隅の幸福』観に転換させることに最大の努力を払ってきた」⁷⁾と批判したことがある。現実の「片隅」の家庭がもつ情緒的安定機能を否定し去ることはできないが、傾聴すべき指摘であろう。

家庭科が家庭生活を学習の対象領域として、家庭内の性別役割分業の問題を問うことは、男女の平等を実現するうえで不可欠であるが、この問題を家庭内にとどめる限りにおいては、当事者間の思いやりの欠如や愛の欠如の問題に解消してしまう。

そこで性別役割分業の問題に切り込むために、教師教育では何をおさえるべきなのかを、藤原実践のなかで子どもが気づき始めた母親と子育て、職業労働の関係を辿りながら整理することとした。

(2) 母親と子育て

学生は、女性が職業労働を中断する理由に「母親は子どものそばにいるべき」、「子どもの成長を見守りたい」をあげていた。男子学生は、母親であるならば子どもとともにいるのは当たり前、女子学生は、母親になったならば自分は子どものそばにいたいと思うはずと考えている。「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業意識は、女性役割に関しては家事よりも子育てにより顕著にあらわれる。「3歳児神話」への共感もこのことと結びついている。家事を男性が行うのは可能で

はあるが、子育ては生物学的にも母親であるべきだと考えるのである。

性別役割分業の問題を学習するにあたっては、母親と子育ての関係の再考を促す試みが必要なのである。前述の小学校家庭科での実践の足踏みは、分業論における「女は家事・育児」の家事の部分にのみ焦点を当てていたことにあるように思える。通常子どもから見た母親は、自分を育ててくれる“育児する親”としての母親なのであって、様々な家事も、子どもの視点からは子育てのなかに位置づくものなのかもしれない。小学生は家事労働を自分のものとして受けとめる発達段階ではないので家事労働から性別役割分業に切り込むのは難しい⁸⁾という指摘があるが、これを言い換えると、小学生は、家事労働を、子育てのために種々おこなわれる大人の労働であると捉え、子育てを担うのは父親ではなく母親であると考えているので、性別役割分業に切り込むには、母親と子育ての結びつきに切り込む必要がある、ということになるだろう。

藤原実践は、自明とみなされがちな母親の子育て役割への素朴な疑問に着目したものである。

小学校家庭科教育法の講義で、この実践を読んだ女子学生が次のような感想を書いている。

「子どもが生まれても働きたいと思っていますが、この実践記録を読んで改めて考えさせられました。子どもが『家にいてほしい』と望むなら仕事をやめてもいいかな、という曖昧な気持ちは、私自身に強い意志がないからなんだと思いました。子どもを言い訳にして自分の生き方を決めてもらおうとしているのかなと思います。(後略)」

「私の母も香坂さんのお母さんと同じ保育士です。私が生まれて仕事をやめました。(中略)母は言います。『子どもが生まれて、子どもとの時間を大切にしたいと思った。そしてお父さんも共働きでこれ以上家事を分担するのはしんどいと言ったから』と。(中略、その後母は何度か臨時職員として働く―筆者注)小学校高学年くらいに成長した私が、どうして臨時で復帰した後、本格的に復職しなかったのかを聞いたとき、母から返ってきた答えは『2年生のときの臨時勤めが終わったとき、あなたがお母さんは、これからずっと家にいるんだね』と言っ

たから』というものだった。低学年の頃の私は、もしかしたら『お母さんが仕事で家にいないとさみしい』というようなことを言ったことがあったのかもしれないし、退職のことを『うれしい』と話したのだろう。その事が母のフルタイムでの復職の意欲をなくさせたのだとしたら申し訳ないと思う。しかしその一方で『私のせい』であるかのような言われ方に、『人のせいにしないでほしい』という思いもある。(中略) 子どもたちにとって『家においてほしいし仕事もしてほしい』という気持ちが時と場合によってどちらかに傾くことがあるのは当然だと思います。片方に気持ちが向いた一瞬を切り取られ、『あなたが言ったから』という言われ方をされてはたまらない。」

2人の学生の指摘は、母親は子どもを自分の生き方の言い訳にしている、自分の決断を自分で引き受けられないのか、という母親への糾弾であるのだが、同時に、性別役割分業を肯定的に捉えているかにみえる母親・女性の、内面の葛藤の存在も浮き彫りにするものになっている。

田中孝彦は、藤原実践に対して非常に興味深い批評をしている。「この子は、お母さんは子どものために仕事をやめたと言っているけれど、お母さんが仕事をやめたのはもっといろいろな問題が複合した結果であるということに、気づいてきています。考えて見れば、これは大きな問題です。たいていの働く母親は、困難にぶつかった時、子どものために仕事をやめるという言葉で自分を納得させることが多い。本当はもっと自分の生き方や生活全体の問題が凝集してきてやめるということになる。しかし、それを子どものためにやめたというふうにして、自分の心に納めるということが多いですね。この子は、そのように言って仕事をやめたというお母さんの話を聞いて、『ありがたいこと』として受けとめながら、『どこか納得できない。喜んでだけではいられない。』という実感をもったわけです。そこから、人間が生きていくうえで、特に女性が生きていく上で、仕事を通じて自分を生かしていくことと、子どもや家族の世話をしていくということが、いつでもたやすく両立するわけではないということに気づき始め

ている様に見えます。」⁹⁾

働く母親が子育てを理由に職業生活を終えるとき、その背後にはさまざまな事情が隠されている。なかでも働く場での女性の扱われ方、女性労働のあり方は最も注意すべき問題と思われる。女性は安上がりで代替可能な労働力と見なされている現実、育児休業制度があっても妊娠・出産が歓迎されるわけではない職場環境、女性が子育てしながら働き続けることを後押しする社会にはなっていない。「子どものためにやめた」という理由づけは、職業人としての自分のプライドを守るための方便でもあるかもしれないのだ。どのように働くのか、言いかえればどのように働かされているのか、働き続ける意志を大きく左右するのである。好きな仕事であるか否かよりもむしろ重要であるかもしれない。次項で触れる働く目的が自己実現であれ生計の維持であれ同じ事である。

実践のなかで、子どもは、「子どものためにやめた」と母親に言わしめる日本社会の現実に気づきはじめています。またこのことは、子どもが母親を1人の人間として理解するようになったことをも示している。性別役割分業をめぐる家庭科の教師教育でおさえおきたいのは、家庭から社会をみるという家庭科の特質を生かしながら、3歳児神話に代表されるような一面的な母子関係の見方に対して問題意識を喚起すること、並びに親を客観視する力をつけることであろう。

(3) 女性と職業労働

2004年11月の「男女共同参画社会に関する世論調査」¹⁰⁾によると、女性が職業をもつことについて、「子どもができてみずっと職業を続ける方がよい」との回答は、若年層(20~29歳)の男性で34.5%、女性で44.9%である。前述した、主に20歳代前半を対象とした本学学生調査の場合は、男28.0%、女30.6%と就労継続希望が同年代の若者と比べやや低い傾向にある。また、目的大学の学生という前提であるにも拘わらず、就労継続希望が高いわけでもない点は気になる点である。

日本の特徴であるM字型の年齢階級別女性労働

力率は、徐々に形を変えている。「労働力調査」¹¹⁾によれば、M字カーブの底にあたる年齢層は、1979年に25～29歳層から30～34歳層に移動し、またこのM字の底は次第に上昇している。2004年の場合、30～34歳層の労働力率は61.4%で、これは前年度比+1.1ポイントとなり、この年齢層の上昇率は最も高い。さらに2005年も同様で+1.3ポイントの62.7%、この時も上昇率は最も高い。「平成16年版 働く女性の実情」¹²⁾では、このことと関連して、近年有配偶者の労働力率が25～29歳層及び40～54歳層で大きく上昇していることをあげるとともに、25～34歳の労働力率上昇の変化要因は、7～8割が未婚率の上昇、残りは未既婚者の労働力率そのものの上昇のためと説明している。

先に学生の就労継続意識は高くないと述べたが、日本では、実際に高学歴女性の労働力率は低い。1997年のデータだが、大学・大学院卒と高校卒の有配偶女性では、35歳を境に有業率が逆転し、以後大学・大学院卒の有業率は他の学歴に比べ低くなっている。また2002年の諸外国（アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン）との比較では、大学・大学院卒の女性の労働力率が、日本はほぼ7割であるのに対し、日本以外はいずれも8割を超えている¹³⁾。

本学学生の就業継続希望が高くはないという事実の一方で、近年30～34歳層の、子育て期の母親の就労は増加している。学生は、子育てが一段落すると考える小学校入学期や高学年期などに再就職を希望するのに対して、現実の母親の再就職時期は、より早い時期にシフトしているのである。

野口やよいは、再就職した既婚女性を2002～2003年にかけて取材しているが¹⁴⁾、女性の再就職理由が、「今や、どうにも経済と切り離せない関係にあ」り、従来言われてきたような「専業主婦からの脱却や飛躍」は、真実の一側面にしか過ぎない、と述べている。男性の経済基盤の弱体化を背景として、再就職の時期は繰り上がり、末子が幼稚園に入る年齢に達した母親の4人に1人は主にパートとして働いていること、非正規雇用の女性を対象とした首都圏の調査では約7%の女性

が2つ以上の仕事をかけもちしていることなどに触れている。女性が働く理由は、「家計補助」から、より切迫した「生計維持」へと変化していると言う。

日本人の高学歴女性の有業率が低いのは、経済的観点から見れば、夫の収入に不安がないからであろう。妻は子どもの出産後は職業生活を退き、3歳までは自分の手で育てる。その後子どもは幼稚園に通わせる。子どもが学齢期を超えるまでは妻は子育てに専念し、手がかからなくなったら、職業生活に戻る、という教員志望の学生が思い描くライフコースは、一部の経済的に恵まれた階層で実現可能な生活である。

藤原実践の中に、香坂奈々さんのお母さんの手紙を読んだ3人の子どもの文章がある。

お母さんに香坂さんのお母さんが書いた紙を見せて読んでもらおうと、お母さんは文を見て「やめたくても止められない事情がある、これを読んで、あ～うちの子もそうなのかな～、と思って悩んでしまうお母さんがいるかもしれない。仕事をやめれるということは、働かなくても大丈夫なんだ。」と書いていました。

母さんはたまに仕事を家でやることがあります。それでその時には、夜遅くまでずっとやっているから母さんは大変なんだと思います。だからごろごろしていてもいいと思うけれど、母さんが仕事をやめるとかなんとか前言ってたけれど、そのときはやめなくてもいいとかボクは言っていたと思います。

でもあんまりむりをしてほしくありません。母さんは仕事はやってもいいと思います。でもあんまりむりをしてたおれたというふうには、できるだけなつてほしくありません。

お母さんは、ただ、無言のままいつもよりもずーと真剣な顔で読んでいた。読み終わった後も無言のままで私が質問するまで無言だった。

だから、お母さんが、どう思っていたかはわかんない。
 だけど、一つは自分と同じ所もあったはず。

生計を維持するために働かざるを得ないお母さん、仕事で疲れ切ったお母さん、そして手紙を無言で読み続けるお母さん。3人の母親は、もはや働くか否かを選択できる状況にはないのかもしれない。無言で手紙を読む母親の胸の内は察するに余り有るものがある。

次の文章は実践を読んだ学生の感想である。

「両親は、片方は家族のために仕事をやめ、再び家族のために仕事を始め、もう片方は、家族のために、時には自分がやりたくない仕事までやっている。この文章を読んで思ったことは、みんな親がやりたい仕事についているように書かれているように見えるが、実際はウチのように、最初はやりたい仕事だったかもしれないが、やりたくない仕事になってきてやめたくなくても、家族のために続け、苦勞を重ねていく人々がたくさんいる。子どもにそんな話をするのが、厳しくて忍びないと思うかもしれないが、知っておいてほしいことだと思う。職場見学などに行っても、基本的には、その仕事のやりがいしか見せてくれない（当たり前の話だ。わざわざ自分の会社のマイナス面を進んで見せようとは思わない）。だからこそ、学校でのそういった場で、そんな話もしていった方が、いや、していくべきだろう。仕事というものは、夢ややりがいだけでは語れないことがたくさんあると思うのだから。」

この学生はむしろ少数派に属する。一般に子どもを4年制大学に進学させることのできる家庭の経済的困窮度は高くはないだろう。そのため、少なくとも学生が、母親は子どものそばにいるべき、いたいと考えている、また子育てを母親は最優先すべきだと考えている、3歳児神話に共感し、3歳までの子どもを保育所に預けることには抵抗を感じると考えている。学生の思い描く生活と、現在進行形の子育て状況には大きな隔りがある。

先の野口は、わが子の保育園でのできごととして、女の子がままごと遊びで母親役を演じるのを

嫌い、押しつけられた子どもが大泣きしたことを紹介している。子どもの目に映る母親像は、「あんなに忙しくて大変なおかあさん」なのである。

そもそも藤原実践は、様々な場で働く人々を学ぶものであった。登場する大人たちは、学生の感想にあるように、仕事のやりがいを語っている。しかしそれだけでなく、子どもは、先の3人の母親の描写にあるように、「夢ややりがいだけでは語れない」仕事の一面にも気づいているように思う。

教師教育の場でおさえておきたいのは、働く(働かざるを得ない)母親の存在と、その母親が置かれた決して十分ではない労働環境と生活環境への理解である。母親は子どものそばにいるべき、いたいと考える学生が一定数存在すること、また高学歴女性の多くはない有業率という事実をみると、彼らが教職に就いたとき、働く母親にどれほど共感できるのだろうかと考えてしまう。発達途上の子どもは様々なつまづきを、働く母親の存在に原因を求めたり、また母親自身が抱える生活に思いが至らず、単純な親批判をおこなう教師では、親との共同の関係はつくれまい。

好むと好まざるとに拘わらず、家庭の外で働かねばならない母親の存在は確実に増えている。このことは、母親の家事・育児と仕事の2重負担の問題をより顕在化させるとともに、一方の父親・男性の長時間労働の非人間性をも浮き彫りにする。両者とも立ち行かなくなり、そこからの離脱と、性別役割分業にかわる関係づくりは今後向かわざるをえなくなるのではないだろうか。

4. おわりに

本論文では、家庭科における家族の学習、とりわけ性別役割分業の問題をテーマとした学習を構想し実践するために、教師教育として押さえるべき内容を、次の2種類の資料をもとに提示した。

一つは教師教育の受け手である、本学学生の性別役割や子育てに関する意識調査の結果、二つめは小学校高学年でおこなわれた働く人をとりあげた実践記録である。

実践記録は、「子どもが生まれたので仕事をやめた」という母親の言葉に、「どこか納得できない。喜んでだけではいられない」と考える子どもが描かれている。

母親の「子どものために」というひとは、強い説得力をもって私たちに迫ってくる。何にも増して価値ある、未来をもった人間としての子ども。母親にはその子どもの運命がゆだねられている。「子どものために」は侵しがたい聖域になる。

教員養成大学の学生にとっても、「子どものために」はより大きな意味をもって迫るのではないだろうか。目的大学の学生として職業に直結する訓練を受けながらも、教職という子どもに直接関わる職業であるがゆえに、女性の場合は「子どものために」職業から離れることも辞さないし、男性の場合は「子どものために」女性に子育てを優先することを望むことになる。こうした意識の一端は、今回の調査結果にあらわれていたように思う。

しかし実践記録では、子育てに我が身をゆだねることが、本当の母親の望みだったのか、という分業論への疑義が提起される。母親を客観視することによって、母親の一面しか捉えていなかった子どもが、母親の多様な面を感じ取っていく、また母親がこの社会で、葛藤を抱えた1人の人間として生きていることに気づくのである。

教師の力量とは、子どもが成長の芽を伸ばしたその瞬間をとらえる力なのだと気づかされる実践である。

家庭科では、ミクロからマクロへ向かうという言い方があるが、言い換えれば、家庭科は家庭から社会を見る教科といえると思う。子どもが家庭生活を学び、社会に目を向ける、その瞬間の気づきを大切にできる実践、そして教師教育が求められる。

- 2) 内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査(平成16年11月調査)」内閣府ホームページ, 2005.2
- 3) 井上輝子, 江原由美子編「女性のデータブック 第4版」有斐閣, 2005.1, p.145
- 4) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局「平成16年版働く女性の実情」厚生労働省ホームページ, 2005.3
- 5) 藤原共子「続 働く人の姿を自立への糧に」教育研究全国集会提出レポート, 2003.1
- 6) 斉藤弘子他「ジェンダー・エクイティを拓く家庭科」かもがわ出版, 2000.9, p.149
- 7) 城丸彰夫「男女共学」『教育基本法』宗像静也編, 新評論社, 1972, p.196
- 8) 前掲書6), p.153
- 9) 田中孝彦「北のきょういくブックレット3 学校に, 人間の成長にふさわしい時間の流れを取り戻そう」, 北海道子どもセンター, 2003.8, p.59
- 10) 前掲2)
- 11) 総務省統計局「労働力調査(長期時系列データ)」総務省ホームページ, 2006.1
- 12) 前掲4)
- 13) 同上
- 14) 野口やよい「年取1/2時代の再就職」中公新書ラクレ, 2004.7

(札幌校助教授)

- 1) 拙著「家庭科の視点とはなにか—『授業開発の基礎』と『小学家庭科教育法』の講義ノートから—」『授業開発の基礎テキスト』北海道教育大学札幌校, 2005.3